



昔の人も、泣いて、笑って、失敗しました。
いつの時代も人間は変わりません。



ようこそ、狂言の世界へ。

狂言は、日本の古典芸能の一つです。

同じ古典芸能である能とは、いつも緒に演じられてきた、いわば兄弟のような関係ですが、その性格はかなり異なります。

有名な観阿弥・世阿弥父子によって室町時代に大成された能には、笑いの要素は切ありません。とても真面目な、シリアスなお芝居です。一方で、狂言は喜劇、つまりお笑い、コメディなのです。また、能の多くは古典作品を題材にしているため、その登場人物は有名な歴史上の人物であることも多いのですが、狂言には有名な人はほとんど出てきません。名もない庶民の日常生活の中で、笑いの世界が繰り広げられます。

狂言で使われる言葉は、室町時代の話し言葉です。もちろん今は使わない言葉もありますが、その演技を見ながら聴いていると、思ったよりも理解できるのではないのでしょうか。言葉も違い、服装も違う。でも、狂言の登場人物を見ると、身近な誰か、時には自分に似ている、と思うかもしれません。時代が変わっても、みんなやることや考えることは同じ。人間の本質は変わらないのだということを、狂言は笑いを通して私たちに語りかけてくれます。

京都女子大学 文学部 国文学科 准教授 川島 朋子

茂山千五郎家

江戸時代初期から京都在住の狂言師の家として活躍。身近で楽しめるという意味の「お豆腐狂言」を家訓として、現代に生きる狂言を披露し、全国の能楽堂、市民ホール、小学校などで数多くの上演を行っています。新作狂言や、オペラや演劇など他分野との共演も積極的に行っており、国内での活動はもとより、海外においても数多くの上演活動を展開しています。



茂山 逸平氏

これは

鳴かずばなるまい。



柿山伏

出羽の国、羽黒山の山伏が、大峰山での修行を終えて帰る道で、おなかが減って来ました。あたりを探すと、そこには柿畑があって、おいしそうな柿の実が実っています。

山伏が柿の木に登って、夢中で柿を食べているところを、見回りに来た畑主に見つかってしまいます。木の上にいる山伏は、色々な動物の真似をさせられ、最後は木から落ちてしまいます。



さても

さても

附子 うまいことじゃ。



所用で出かける主人は、召使いの太郎冠者と次郎冠者にする番を言いつけます。その時、附子という猛毒を持ってきて、「これは附子という猛毒で、風に当たっただけでも死ぬから、絶対に近づかぬように。」と言い残して行きます。

二人は附子が気になって、恐る恐る近づき、中を見ると毒ではなくて水あめでした。

二人は夢中になって全部食べてしまいます。このままだと主人に怒られると思った二人は、言い訳のために大事な掛け軸や茶碗をこわしてしまいます。